

訂正版

十字架の御子に惹かれし 我が居り

肥やし耕し 子らと根を張り

園長 古江 和夫

四季があり、自然の恵み豊かな国。それが日本の正イメージだとするならば負は間違はなく自然災害の多さだと言えるでしょう。今夏も酷暑と水不足。そうかと思えば豪雨による水害と、天候の大きな振り幅に地震、噴火、津波も加わります。災害によって状況が一変してしまつた方々の生活に一日も早く安心が訪れますことを祈ります。

児童養護施設。多くの喜怒哀楽がここにはあります。ここで働くすべての職員は子どもが好きで、自身の貢献を望んでいます。だからこそ生活に表れる子どもの喜び、悲しみ、怒りを大人は受けとめ、考えを巡らせ、葛藤を抱えもします。「子どものために」と思えばこそ、そこに「大人（自分）」とは何か」を考えざるを得ない宿命があるように思います。子どもに向き合ふとするのは、実は自分自身をよ

り深く理解したい、受け入れたい、そして変わりたいとの思いからなのかもしれません。

日々の向き合いにどこか行き詰まつたとき、自分の感覚を信じるのと同じようにその子のことを信じてみる、腹が立つてもなぜかその子に纏わるあれこれが気になる、そして対応してしまう、後で自己嫌悪してしまう。こんなことが絶え間ないのは、きつと子育てをしながら自分のことも育てているからなのでしょう。

一方、かく言う私こそが一生、自分育てを終えられそうにないなという自覚があります。そもそも私自身の不定形さが子どもに関わりたい情熱の根源であるからこそ「根を持ちなさい」とカトリック施設に招かれた気がするからです。

「子どもには夢、希望、無限の可能性がある」等というイメージは、以下の短歌のようにどなたにもご賛同いただけることでしょう。

「とびはねている犬

こども 全世界共通語

ねえ、光りましようよ」

笹井 宏之

子どもの存在自体に対する大人側の憧憬も含まれます。しかし、それを子ども自身が発揮するためには不可欠な要素があります。それは「子ども時代」を生きている彼、彼女らに、存分に注がれるべき大人からの愛情ある言葉や眼差し、働きかけ、理解からなる安心・安全感です。それを保障していく意味においては、社会的養護の暮らしは良い土を作り、種を蒔き、水を遣る等の「手入れ」の日に邁進することと言えるのです。

八月の初旬、ここ数年来の全国の皆様からお寄せいただいたご寄附の一端を原資として、子どもたちを東京デイズニールランドへ連れて行ってきました。幾つかのハプニングもありましたが、総じてこの旅行は子どもたちにとつてとても刺激的なよい経験となりました。当園の子どもたちがより光るためにご支援くださいました皆様に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

また、この一年も、子どもたちは心も身体も一回り大きく成長することができました。これもひとえに当園を支えてくださる大勢の皆様のお陰でございます。ここに重ねて深謝いたしますとともに、今後の皆様方のご健勝を祈念いたします。